

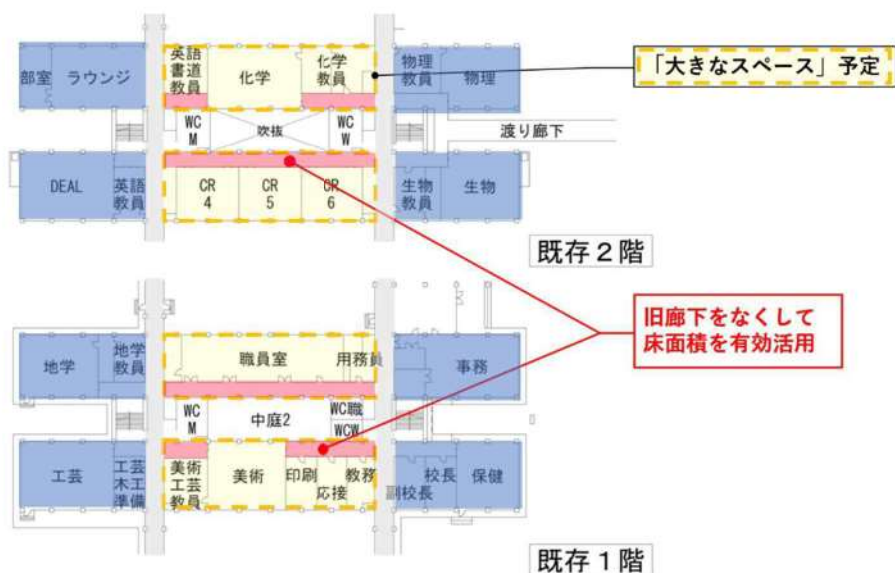
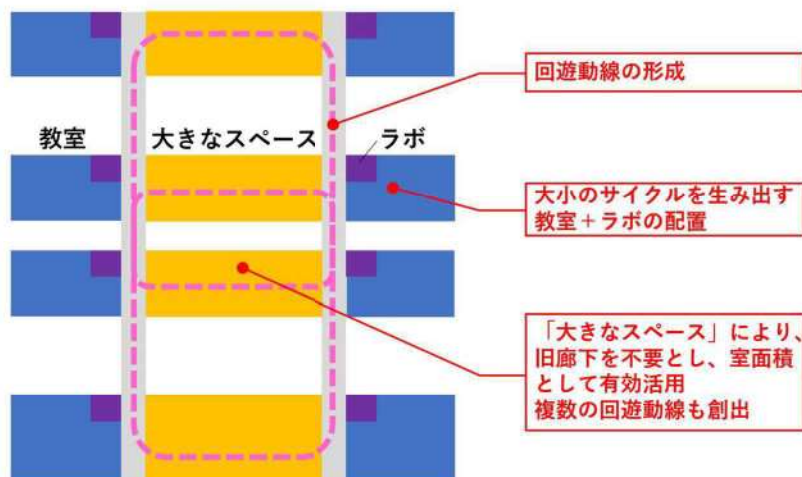
4. リノベーション各項目の検討

4.1. 校舎ダイアグラムの再構築

既存校舎の躯体をそのまま再利用する改修計画であるが、現状にとらわれることなく、新たな見方で新たなゾーニングやダイアグラムを生み出すことが必要となる。

4.1.1 床面積の効率 廊下→居室へ

既存校舎の各棟にある廊下をなくし、床面積を有効活用できるダイアグラムを考案した。結果的にオープンで明快な空間構成が生まれ、自然な回遊動線も生まれることとなった。

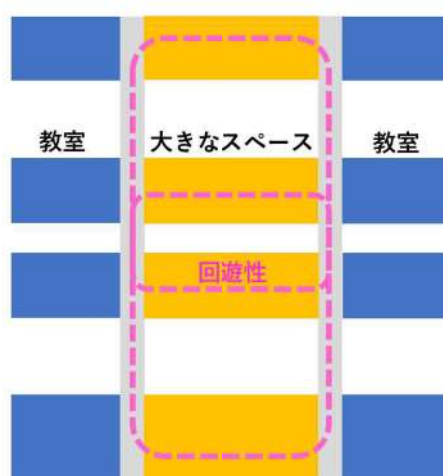


4.1.2 回遊と興味喚起

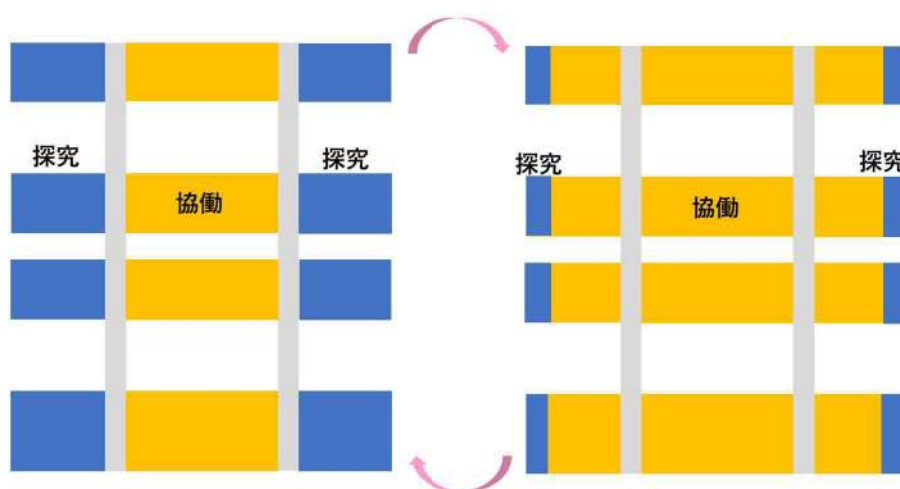
回遊動線は、単なる移動動線ではなく、興味喚起を担い、ひいては附属校の探究的学習を深めるものでありたい。ここでは回遊動線に沿ってラボやクリエイトラウンジ、壁面展示スペースなどを設けて、コミュニケイティブな空間となるよう構想した。またこれらが学びのモードチェンジや時代に応じたフレキシビリティにもつながるように組み立てている。

□大きなスペース+回遊性

- ・フレキシビリティ
- ・コミュニケイティブ



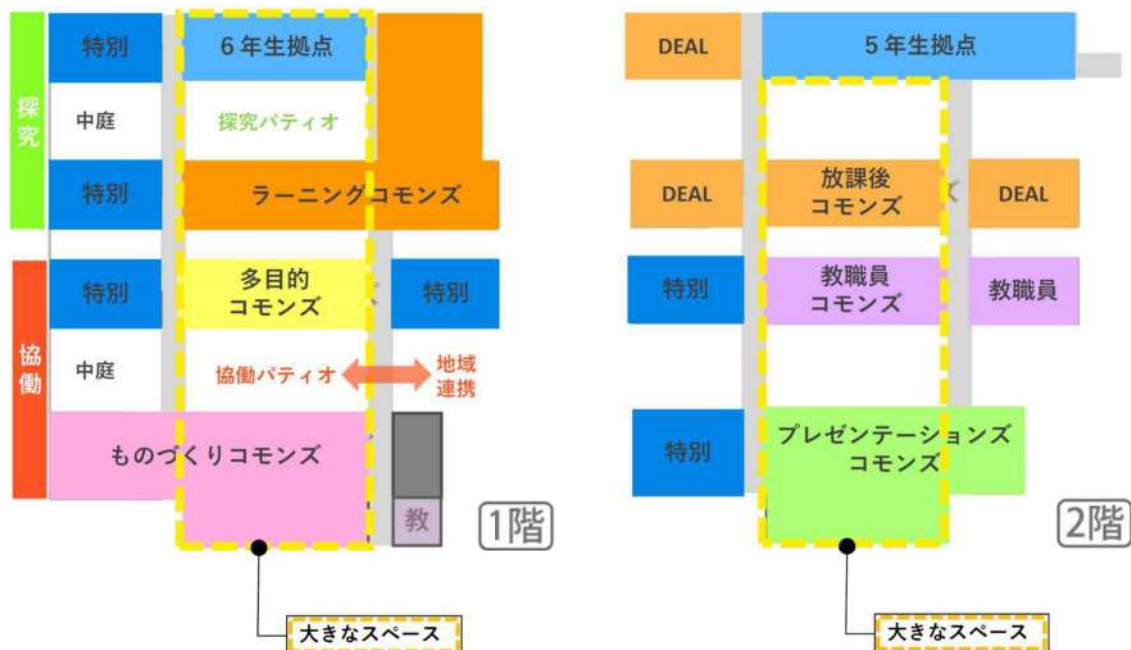
□学びに応じたモードチェンジ・時代に応じたフレキシビリティ



4.1.3 コモンズによるゾーニング

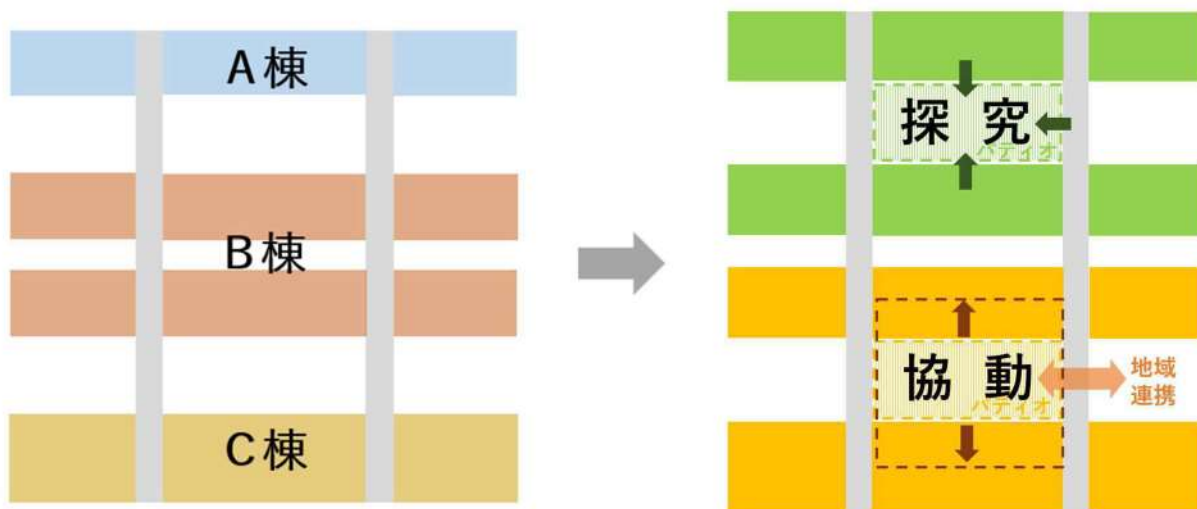
先述のダイアグラムに具体的な空間をレイアウトしていく際に、室名を当てはめる前に、まずゾーンを形成するよう検討した。ここでは次代の学校を統べる概念を「コモンズ」と考え、学びに応じた「コモンズ」が展開するような空間構成を作り上げた。

- ラーニングコモンズ □ものづくりコモンズ □教職員コモンズ
- 6年生探究コモンズ □プレゼンテーションコモンズ
- 探究パティオ □協働パティオ



4.1.4 「A + B + C」から「探究・協働」へ

現校舎は東西に横長で、各々を「A棟」「B棟」「C棟」と呼んでいる。これも現状にとらわれることなく、新たなダイアグラムで刷新を図る。下図のように中庭を挟んで向かい合う校舎を一組と考え、各々を「探求」「協働」としてのまとまりを作る。これに向けて室レイアウトを構築していく。



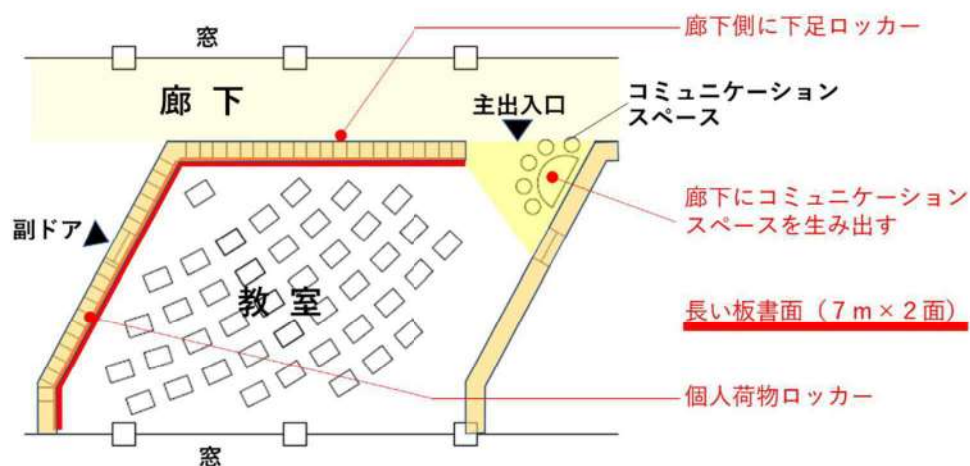
4.2. 普通教室の検討

現校舎の建設当時、附属校の教育に即した校舎として「特別教室充実型」が議論され実現に至ったが、逆に普通教室の空間的・機能的な充実が成し遂げられなかったことが、反省点として当時の後日談に残されている。今回のリノベーションではこの点の改善は必須と考え、普通教室の機能向上、面積拡大などに取り組むこととする。

4.2.1. L型教室の提案

普通教室の改善として、下記項目に取り組み「L型教室」として提案した。

- ①室面積増 ②板書面積増 ③多様な机配置 ④個人ロッカーの配置 ⑤明るい環境
- ⑥生徒のコミュニケーションスペースの創出 ⑦フレキシビリティの確保



4.2.2. L型教室の特徴



板書面の確保で現代的な授業に

スライド、映像、板書などを同時並行できる授業中に板書を消さなくてよい
 ログの取れる白板、実験映像などの投影で、複眼的・効果的な授業を
 移動式の短焦点プロジェクタなどの工夫も

個人ロッカー

W300×H900 を確保できる
 教室にあるので随時出し入れできる
 1 段式として混雑を緩和できる

多様な机配置

変形していることで多様なパターンが生まれる

明るい教室

ランマガラスにより明るく広々とした環境
 ドアにないオープンな雰囲気

コミュニケーションスペース

廊下にも生徒の溜まりスペースを生み出す

これに対し、協議会で

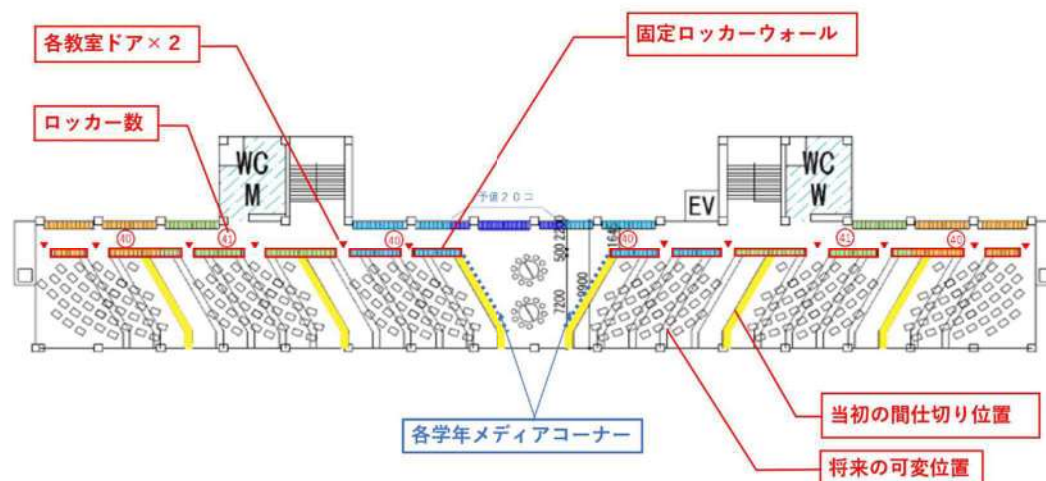
- ① 随時閉鎖できるドアが必要（音響、防犯）
- ② 個人ロッカーは廊下側からの利用に
- ③ 欄間窓をなくして大型映写面を可能にとの意見があり、反映することとした。

4.2.3. L型教室の発展形 & 普通教室の長期のフレキシビリティの担保

上記①～③の意見を反映し、教室の機能性を高めた。

また、将来40年のことを視野に入れたフレキシビリティも確保することができた。

- ・個人ロッカーは廊下から使えるレイアウトとした。
 - 教室の近く、かつ人が集中しない1段型になるので、今より便利でスピーディーに
- ・教室間は改修可能な壁に
 - ここはランマ窓はやめて天井まで壁とし、大型映写面に活用。
- ・生徒の溜まりスペースは階の中央に集約。
 - 2面ある壁面を、各学年の「学年メディアスペース」に
- ・これらによって生まれる将来の可変性
 - ロッカーは変えずに、中教室、小教室への転換ができる。←未来の変化への備え



4.2.4. 多様な机レイアウトのできる教室

普通教室は、特別教室のある教科においても多くの時間ここで授業を行うこととなる。授業の運営が多様に確保できることは、教育スタイルの多様性に大きな担保を与えることとなる。L型教室は平面がひし形をしているため一つの対角線が長くなり、それによって多様な机配置が可能となる。

□ 一斉学習スタイル ～ 一人型

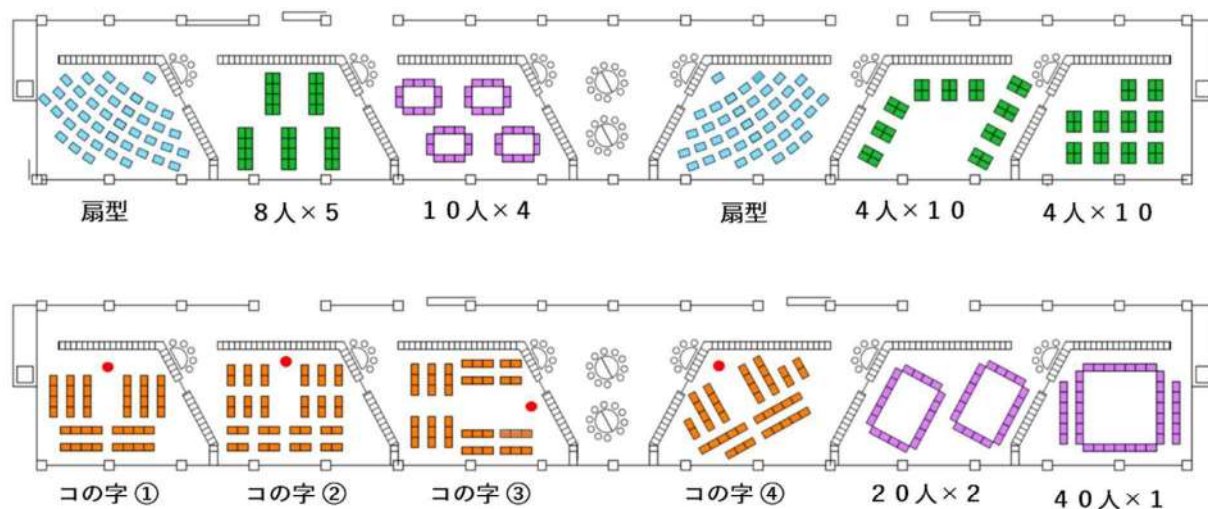
横に長いL型白板でたっぷりした面に向かい、授業中に消す必要がなく、映像+板書の現代的な展開ができる

□ 討論スタイル ～ コの字型

3方向が白板のため、さまざまな方向に向けた囲み配置が可能

□ グループ学習スタイル ～ 島型

「4人×10グループ」「8人×5グループ」「10人×4グループ」「20人×2グループ」「40人のラウンドテーブル」まで、多様なグループ学習を許容。



4.3. 特別教室の方針 → フレキシブル化の検討

4.3.1. 特別教室の専門化とフレキシブル化

特別教室は、1983年の建設当初より重点的な充実が図られており、学びを深める意味でも重要視されるべきものである。

これまで本校舎には、理科の物理・科学・生物・地学の4教室、そして家庭科（調理室・被服室）・技術科（技術室・工芸室）・芸術科（美術室・音楽室）および社会科の特別教室において学習を展開してきた。

また2002年度より供用が開始された総合教育棟において実習実験室①～④、OA教室①～④を設置し、特別教室を持たない教科の少人数制授業や情報科の授業をはじめ、多様な学びを展開してきた。

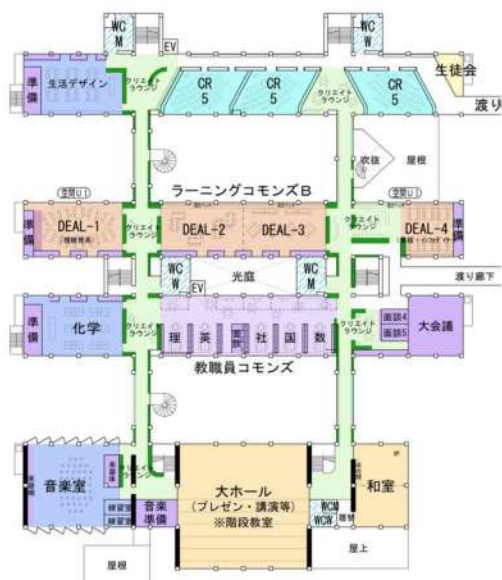
さらに、2017年度には英語科のLL教室を解消し、空間UIシステムを備えたDeAL教室として展開、この空間UIはさらに2021年度に実習実験室①にも拡大されている。

本校舎の管理機能を総合教育棟へ移し、実習実験室が果たしていた機能を本校舎に集約し直すこと、また学校全体のICT化を進める中で、情報科に求められる空間と、それ以外でICTを活用する空間とを峻別しながらOA教室の再編が求められている。

そこでは、これまで特別教室を持たなかった教科の学びが、普通教室以外の空間でどのように深まるのか、未来像を含めて描かれなければならない。

さらに、教員が主導する時間割内の学習を越えて、生徒個々や生徒集団が自律的に学びを発展させ得る空間としてラーニングコモンズをどのように展開するか、あるいは部活動や委員会といった放課後の課外活動の豊かな展開をどう保障するかといった視点をもちつつ、限られた空間を活用しなければならない。

そこに至る道筋としてSTEP1～4の考え方を下記に示す。



**STEP1 教科室は減らさない。
教科の愉しさをスポイルしない。
教科の専門性は残す。**

- ・教科教室の充実が附属の最大の特徴であったし、これからもそうありつづける。
- ・実習、実験、ホンモノの事物に触れる、手応えのある学びを
- ・放課後は学びを掘り下げる拠点となる空間に

**STEP2 特別教室を持たない教科にも学びを
深める場所を**

- ・国数社英も専門教科である。他教科と同様、特性に沿った学びを深める環境を形成できるように。
- ・時間割の空き時間には各教科で自由に運用できることが望ましい。
- ・STEAM教育への傾向。未来の変化への備え。

**STEP3 他教科・課外活動への使いまわしが
容易にできることが重要**

- ・放課後との場面転換が不可欠
- ・少ない面積の共有 ～ 難しいことはしない、
開け放つだけで
- ・選択授業、少人数授業の増加の趨勢。
← 未来の変化への備え

**STEP4 使いまわすために各教科の専門性が
低下しないよう工夫＝L型の専門
スペース**

- ・両側採光の室なので、採光は片側からのみとし、片側を壁面や棚として活用し、奥側とL型の専門スペースを形成。
- ・ランマ窓は確保して、風が抜ける環境に。また、スリット状に中庭が見える窓を設けて、パティオの様子が感じられる教育環境に。
- ・簡単に放課後モードに転換できる工夫

このなかでこれまで「実習実験室」「O A 教室」「D e A L 教室」と呼び分けていた専門教科化しない特別教室を、すべて Deep Active Learning (探究的、協働的な深い学び) を志向する部屋、という意味で DeAL 教室と呼称する。

その中には、空間 UI システムがあるものないもの、放課後が主役のcommonsを授業時間帯には授業でも活用するもの、あるいは多少は教科特性に寄せた活用を行うものなど、多様性を持たせていくこととする。

4.3.2. 改修前・改修後

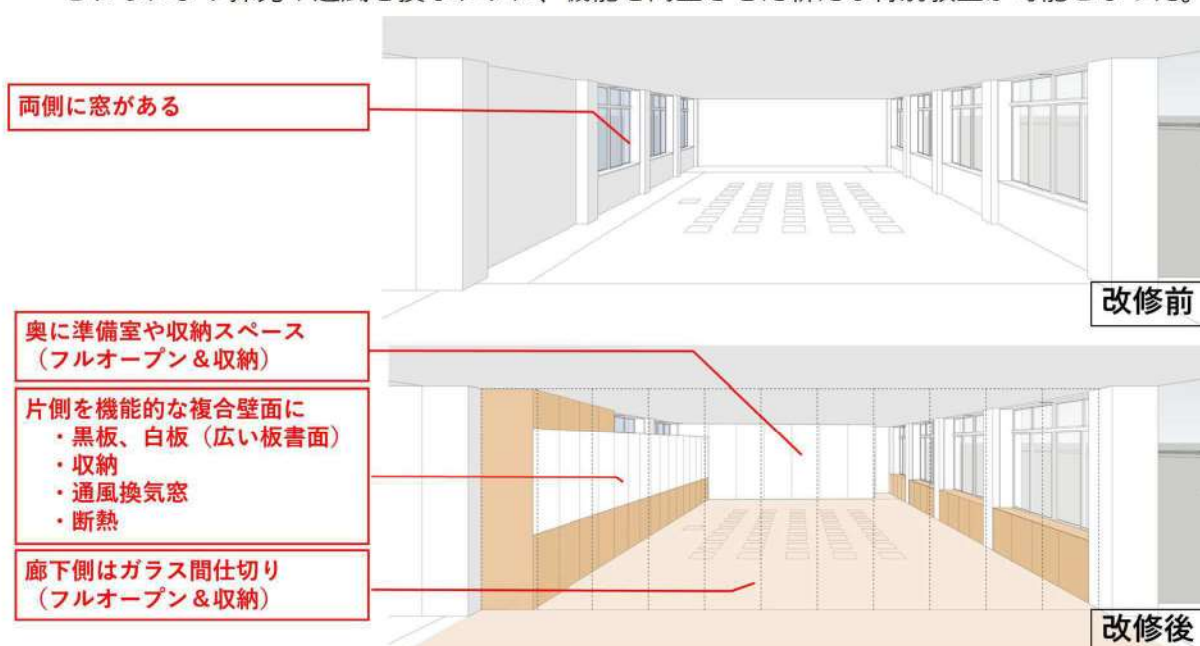
現状の特別教室は校舎端部にあり、教室正面は突き当り面、両側面に外部に面する窓がある構造となっている。

特別教室も普通教室同様に大きな板書面や物品関係の収納スペースが必要となるため、窓面にインフィルを被せるかたちでホワイトボードを設置したり収納スペースを確保する。

また正面の奥側にも収納・準備のバックヤードを設ける。また、ふさがない窓面にも腰壁部分を収納などに充てる。

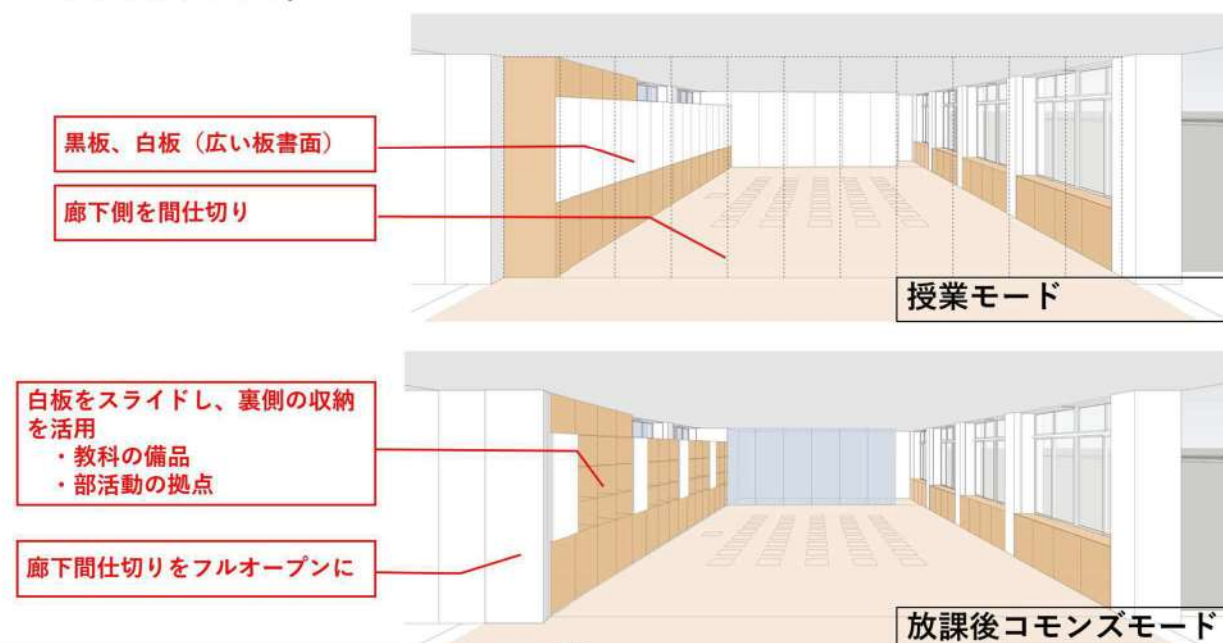
窓をふさぐ面でも、換気用のランマ窓などは残して通風環境を確保する。

これらにより採光や通風を損なわずに、機能を向上させた新たな特別教室が可能となった。



4.3.3. モード変化

廊下側の間仕切りは、容易に開放できるようにして、放課後へのモード変化を容易にする。ガラス建具やシースルー棚などで、内部が良く見え、専門教科の興味深い雰囲気や廊下にも伝わるようにする。



4.3.4. 改修計画上の注意点

フレキシブル化に伴って、専門教科室や準備室の考え方を検討していく必要がある。
その際、目指す教育施設の全体像に向けて、下記の点に注意する。

- ・ 学びを深めるために専門教科室を増やす場合

「一斉に教える授業」の集まり」とならないよう、全体像を見失わないようにする必要はある。

深めた学びと学びを掛け合わせることが出来るような空間となるように、検討が必要。

各教科の現況への不満から出発すると、ともすれば古めかしい学校のクローズなイメージが顔を出し、21世紀後半にも通用するような教育環境が得られない。

- ・ バックヤードの考え方

放課後コモンズへの転換を目指して収納・準備のバックヤードを奥のほうに配置したが、放課後コモンズへの転換が行われない室については、奥への配置は必須ではない。このような場合のバックヤードはディスプレイ機能を持たせ廊下に面して配置するほうが、専門教科への興味を通りかかる生徒に喚起しやすい空間の実現につながる。

また、これまでは特別教室の準備室＝その教室を主として利用する教員の居室として、教員－生徒、教員相互の交流を阻害する要因となっていた。授業準備を行うのに教員の居場所がアクセスの悪い場所であってはならないが、バックヤードが居場所となって孤立を招かないような設えが求められる。

- ・ 国・数・社・英 の教室名称を DeAL 教室に記載する場合

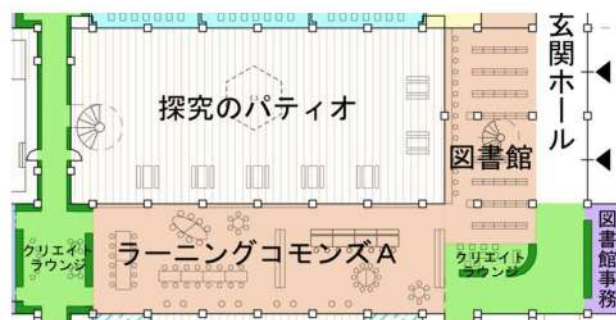
専門教科室を増やすのは、授業の深まり、各教科が優先的に利用できる利便性、を意図したもので、教員の居場所を拡散的に設けるものではない。教員の居場所はいくまでも総合教育棟の職員室と教職員コモンズである。また、国・数・社・英に「国語 DeAL」「数学 DeAL」など専門教科室を設けた場合でも、ほとんどの授業は普通教室で行うこととなる。こういったことを混同せずに進めることが重要となる。

4.4. ラーニングcommons・放課後commons

ラーニングcommonsは、協議会の先生方が何度も強調されたように、「占有されない場を作ること」「利用する場のタイプ（性質）を選べること」が重要であり、「可変空間は使われにくい」ことに留意することが原則となる。本校の計画では、床面積が限られる中でこれらの条件を満たすことは全体のバランスを考えた場合に適切ではないため、計画に苦慮することとなった。ここでは下記のようにラーニングcommonsを大きく2つの用途に分けて考えて解決を図った。

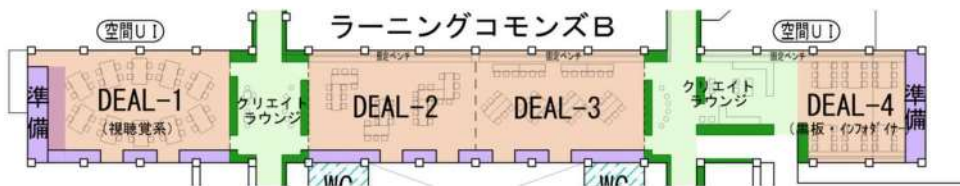
① ラーニングcommons ～ 図書室を中心としたゾーン

今までの図書室の使われ方をさらに面積的に拡大した「図書室+ラーニングcommons」を整備する。従来よりも面積を拡充し、中庭とも連続し、ひとりで集中できるスペースも整備する。位置は6年生の拠点（個人ロッカー）の近くとすることで、選択教科が増え日中にフリーの時間が増える6年生に居場所を提供しやすく、卒業研究への自主的な時間の使い方を提供しやすい場ともなる。



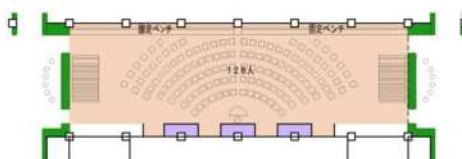
② 放課後commons ～ commonsとして整備し、そこで授業を行う空間

DEAL室のうち中央の大きな空間を、放課後をベースとしたリラックスした雰囲気の空間としてつくり、それを授業にも活用できるよう装備することで、場面転換しながら運用できるようにする。グループワークや課外活動の展開できる場として、様々な目的、規模、の集団を許容していく。



また、中央の可動間仕切りを開ければ、学年集会のできる大広間となる。

場面 ↓ 転換



4.5. 教職員 commons

現校舎の建設ときに「特別教室充実型」として整備された本校舎であるが、時代を経て顕在化してきた課題がコミュニケーションの問題である。先生と生徒の関係だけでなく、教職員集団の新たなありかたをつくるのが、これからの時代の教育には大変重要となってくる。特別教室の準備室に先生の居場所を設定すると、コミュニケーションが生まれにくく、長期的に構造的な課題を生んでしまう。そこで今回計画では「教職員 commons」として大きな室を設定し、基本的にはすべての教職員の居場所をここに設定することとした。

ただし職員ゾーンには外部に見せられない情報や書類も多いので、そのために教職員 commons は2エリアを設定し、用途によって使い分ける。また2か所の教職員 commons 同士の連携も重要となるため、本校舎2階+総合教育棟2階と同一フロアに設定する。

生徒から見た場合には、先生の居場所を探し回る必要もなくなり、気軽な相談を行う敷居が低くなり今まで以上のコミュニケーションに効果的となる。

□教職員同士の連携が教育に及ぼす効果は下記のようなことが想定される。

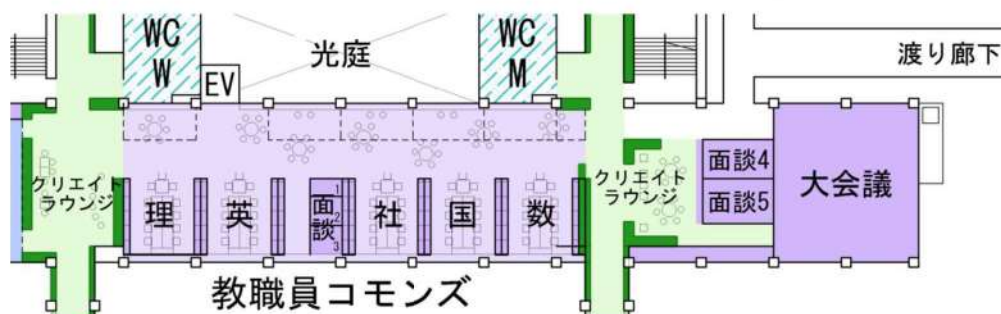
- ・教職員 commons での先生同士のコミュニティ形成（授業・生活指導・部活動）
- ・教材の共有による意識の共有と省スペース
- ・附属としてのまとまりをもった授業のありかたへ
- ・教科×教科で新たなカリキュラムを育む力へ

□総合棟との性格分け

- ・朝の連絡会議、職員会議、集中した作業、ノマドワーク、試験期間の作業、などは総合棟の教職員 commons にて行う。

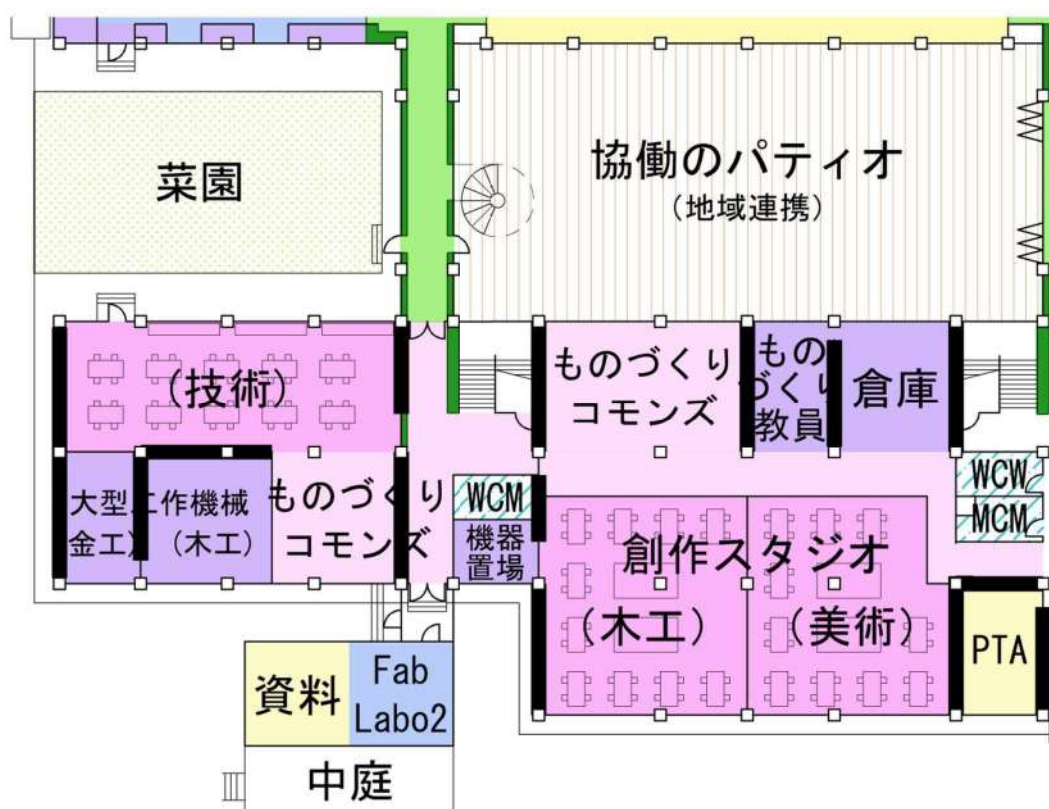


教職員 commons のイメージ



4.6. ものづくりコモンズ

工作室、技術室などの創作系の授業では、作業に伴う音が出ることから、それが他の授業に影響の無いようゾーニングする必要がある。ここでは美術室も加えて「ものづくりコモンズ」を形成し、騒音の影響の少ないエリアとしてC棟1階にまとめる。工作機械の共有、広いテラスを用いた展開、学園祭での作業拠点などの生き生きした活動が期待できるほか、地域開放のできる中庭＝「協働パティオ」に面しており、ACUTのワークショップやセミナーにも多用途に使うことができ、地域に開かれた学校、地域との協働、にも力を発揮する。



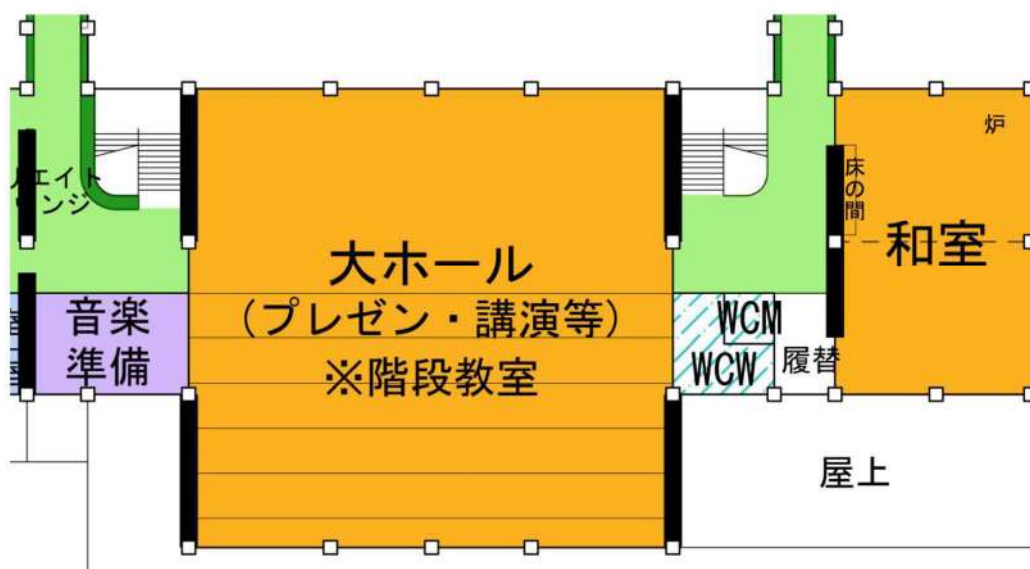
4.7. プレゼンテーションコモンズ

「発表のできる場が少ない」との多くの意見を受けて、検討が進められた。規模的には「120人（1学年）が集まれるスペースが3か所」が理想形として求められた。

本校舎C棟2階大ホールを階段状のプレゼンホールに改修し「晴れ舞台」を作り出す。加えて放課後コモンズ、1階多目的ホール、総合棟4階ホールが大人数の集まりが可能な室となり、この要求にこたえている。

旧大ホールは体育で室内軽運動を行うことが多いので、これを新設する1階多目的ホールで行う設定とし、カリキュラムに不都合がないようにしている。

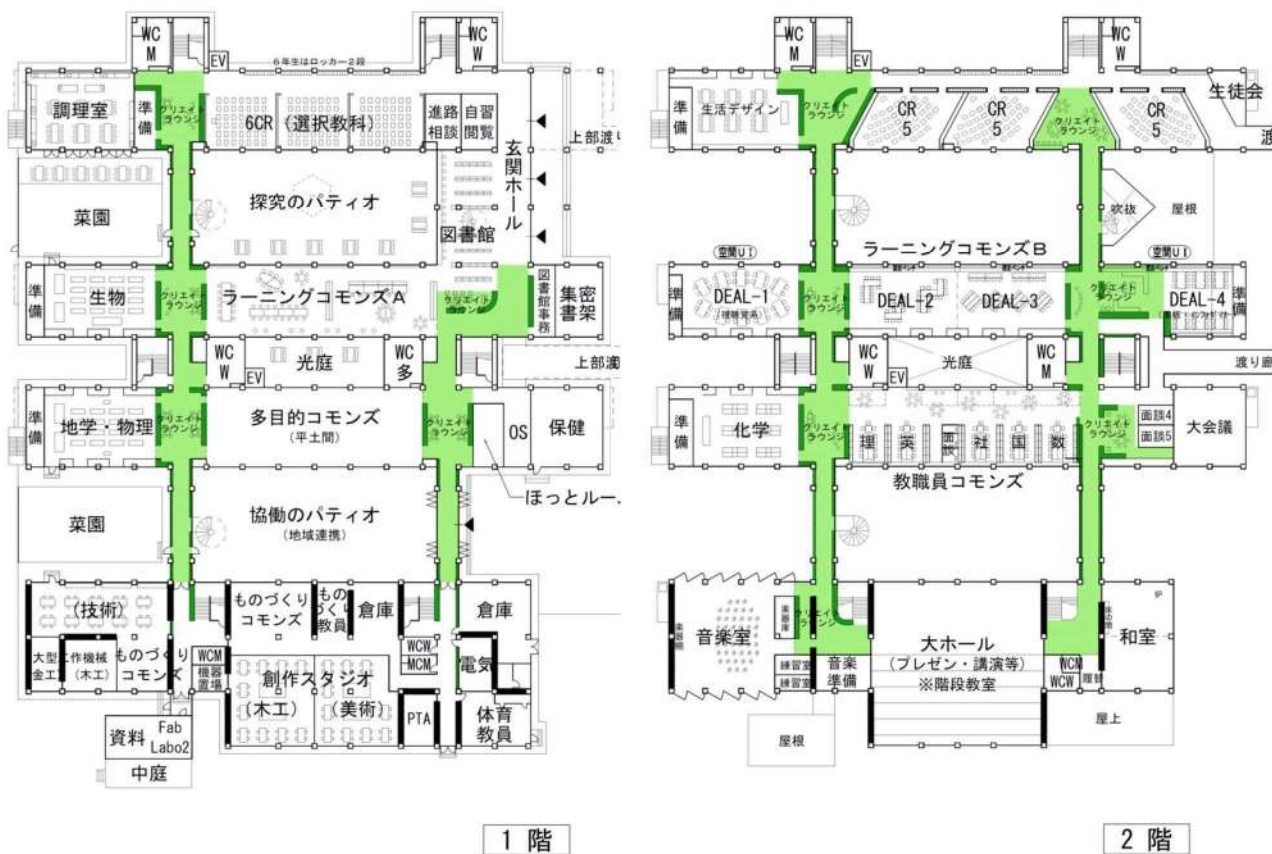
和室もプレゼンテーションコモンズの一翼とした。附属校の卒業生が世界に羽ばたいていくときに、日本文化の中核としての和室を体験しておくこと、また畳の部屋での発表活動も様々に工夫できることを期待した。



4.8. クリエイトラウンジ

本校にとって「探求」と「協働」は表裏一体の二重らせんである。これらをつなげる回廊の意味づけは重要となる。単なる周回できる移動動線ではなく、コミュニケーション、興味喚起、展示、教科の掘り下げ、など授業を取り巻く様々な補助的活動を支え、伸ばしていきけるような空間形成が望ましい。

そこで、特別教室の前の廊下をアルコーブ状にふくらませ、クリエイトラウンジとした。ここに教科の興味を引く展示棚・パネル・テーブル+チェアなどを配置し、先生への質問、好きな教科の友人同士でのディスカッション、などが気軽に展開できるような空間とした。さらに季節や時節での展示の入れ替えによる興味喚起、専門的なデバイス類の醸し出す学びへの興味や楽しさの醸成、美術・工芸などでの制作物を展示できるピクチャーレール、など学びの深まりやその共有にふさわしい空間となるようにした。



4.9. 探究パティオ ～ 主体的な学びの拠点の形成

図書館＋ラーニングコモンズ＋探究パティオ

附属の6年生は、卒業研究のまとめの学年であり、選択科目も増えることから自由時間も増えてくる。また最高学年として他学年からの視線も受ける。これらを統合的に考え、6年生の拠点は1階の玄関わきのゾーンに設定し、ここに図書室＋ラーニングコモンズ、および整備された中庭も一体として、6年生拠点を形成する。



6年生拠点を囲む「探究のパティオ」を形成

- ・毎日、探究パティオを見ながら登下校。
- ・登下校で先輩の頑張る姿が目に入る。
- ・向こう側の図書館も見える
→千葉先生の講義録にもある空間性

ラーニングコモンズの日中の規模の適正化

最高学年の拠点にふさわしい空間のまとまり

以上に加え、進路相談室、会議室も併設して、最高学年の6年生の拠点にふさわしい空間のまとまりをつくります。このゾーンが附属の教育の姿を醸し出します。

＝ 探求的市民の目標

探究パティオを活用したACUTワークショップの提案

- ・パティオの真ん中にアートを！ACUTのワークショップで！

→「探求」を象徴するアートなどを！

＝ 未来づくり

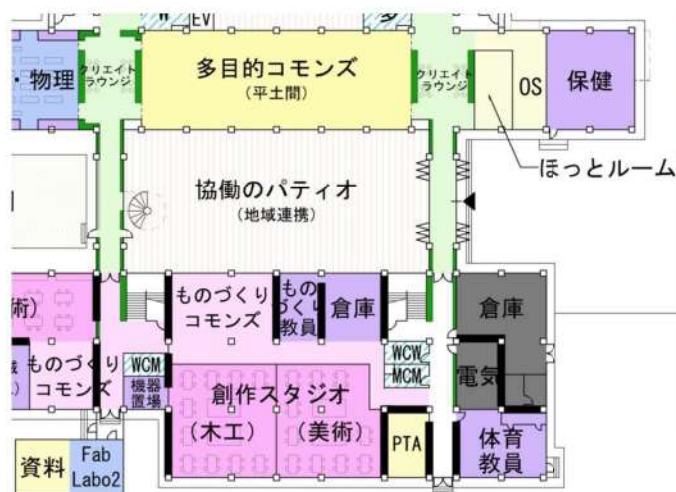
- ・すぐに設置されなくてもよいので、年々積み重ねて、時が熟したら設置する。

4.10. 協働パティオ ～ 地域連携拠点の形成

ものづくり commons + 多目的ホール + 協働パティオ

ものづくり commons、多目的ホール、に挟まれた中庭は、「協働パティオ」として位置付け、地域との連携の中心とする。地域の方を直接招き入れることができるようにし、工作機械の共有、広いテラスを用いた展開、により ACUT のワークショップやセミナーにも多用途に使うことができる。

協働パティオに面した2階には教職員 commons があることから、地域協働の活動状況も把握しやすく、防犯的な面でも効果を発揮する。C棟2階はプレゼンテーション commons となっており、発表会を地域向けに企画する場合でも、最小限の校舎開放により運営が可能となる。



ものづくり commons や多目的ホールと一体となった「協働パティオ」が、地域を引き込む

- ・ものづくり commons や多目的ホールが協働パティオとつながり、広々とした環境で地域の様々な活動と連携。
- ・渡り廊下を横断してアクセス
←1.5 足性が効果を発揮性

4.11. 上履きの扱い

現校舎は上履きで運営されている。今回の改修に向けて、床面積を縮減しつつ中庭の効果的な活用も求められることから、当初は1足制のメリットが注目された。他方、屋内床の衛生面や、屋内軽運動の頻度と履き替えのための体育館靴箱への移動時間が授業運営にデメリットとなることも懸念され、2足制の維持を求める声もあった。協議会での結果、そのどちらでもない「1.5足制」により、それぞれのメリットを生かすことのできる方式が採用された。

上下足の考え方 = 1.5足制

教室前の廊下に下足ロッカーを設け、
通学靴で教室前まで行って、そこで上履きに履き替える方式

- メリット
- ①校舎内・教室内の床衛生の確保
 - ②校舎内の軽運動シューズが不要
 - ③最小限の履き替えとなり、授業運営をスムーズに

シューズ
の種類

通学用

上履き

体育館用

校庭運動用

通	学	通学用	ローファーやブーツもありうる
教	室	上履き	教室内に雨や砂を持ち込まない
廊	下	共存	通学時のみ下履き
校舎での軽運動		上履き	履き替え不要なので運営がスムーズ
体育更衣室		上履き	従前どうり。衛生確保が容易
体育館		体育館用	従前どうり。体育館2階で履き替え
校庭		校庭運動用	従前どうり。体育館2階で履き替え
校舎の中庭		共存	上履き or 下履き

■一足制のメリット

中庭・校庭をつなぐ連続的な内外学習

昇降口に限定されずに、外部から出入りできる。

学習活動を途切れさせることなく、内外を移動可能。

移動時間の短縮

上下足の履き替え時がなくなり、円滑な授業進行が可能。

スペースの有効活用

昇降口における、靴箱スペースが不要。

地域開放での自由度とセキュリティの確保

動線の制限が無い各教室への直接の出入りなど、一体的な活用が可能。

エリアを限定した、部分的な地域開放が容易。

■一足制のデメリット

床での学習

衛生面で床を使った活動（習字など）の問題。

運動専用靴

体育施設以外で運動を行う場合の靴の問題。

清掃

雨天時は床マットを利用する等、床の水漏れへの対応の問題。

校庭のゴムチップを持ち込む問題。

雨天時の衛星

雨天時に濡れた靴を一日中履く、衛生上の問題。

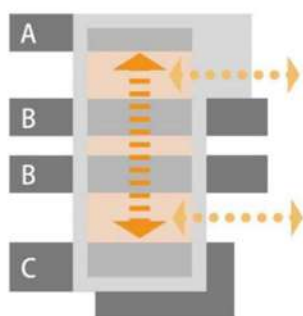
施錠・防犯

屋外の接点が多くなる、施錠・防犯の対応の問題。

4.12. 中庭の活用

現状の中庭は、1足制の校舎であるため利用されにくかった。校舎の床面積を有効に活用するため、内外が一体となった教育環境が求められる。そのため1.5足制を採用するが、それに伴い中庭は上履きでも自由に入出りできるような床材を採用し（デッキ材や舗装材）、有効活用を図る。

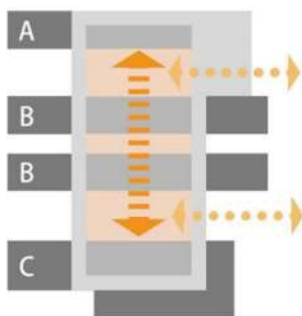
中庭を活かすには？



A棟⇄C棟をつなぐ
内外の活動の可能性



中庭を活かすには？



A棟⇄C棟をつなぐ
内外の活動の可能性



4.13. 各学年への配慮

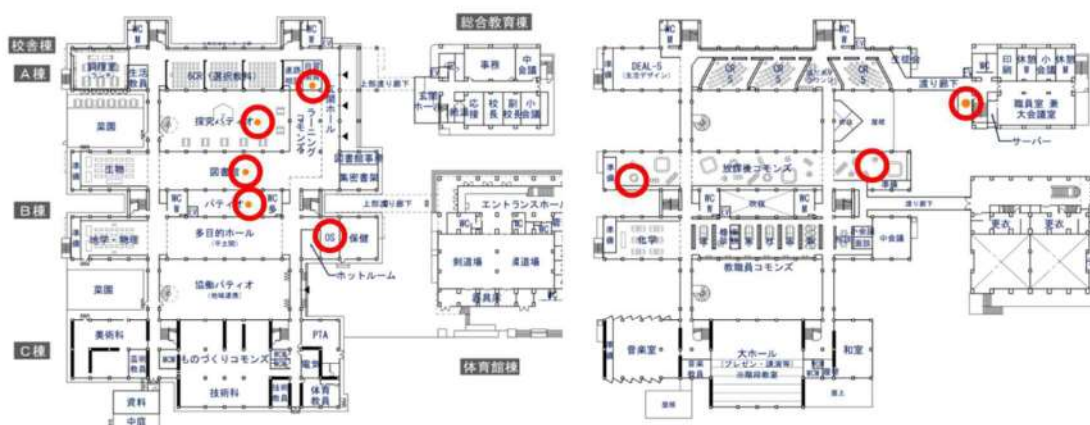
附属の1～6年生は、学校生活の中で、各々の学年で特徴的な役割や立ち位置が伝統的となっている。これを活かせるよう、各学年の配置などに配慮を行った。

- 1年生・2年生 : 入学間もない学年でもあり、自分の拠点を明確にし、学校生活にも慣れていけるよう、B棟3階の普通教室ゾーンに設定する。
現在は2か年担任制を敷いているが、普通教室は各室同一仕様で個人ロッカーも廊下側に設定されているので、この2年間で教室を変えずに運用していくこともできる。多くの授業を自教室で受講するので、教室は多機能なL型とする。
- 3年生 : 中学校の卒業学年であり、前期課程の最高学年であり、前期課程のまとめ役で、5年生とともに学校全体の運営のかかわることも多くなる。今後の進路の相談も増えてくるので、2か所の教職員コモンズと連携の取りやすいA棟3階に設定する。多くの授業を自教室で受講するので、教室は多機能なL型とする。
- 4年生 : 3年生と同一ゾーンとして、2か年担任制のもと、3～4年生の2年間で教室を変えずに運用していくこともできる。
- 5年生 : 選択教科や卒業研究が始まり、学校生活が変わる学年である。主体的な学びを行いやすいように、2階回遊動線＝クリエイトラウンジの一角に配置する。選択教科以外の科目もまだまだ多く、自教室での受講も多いので、教室は多機能なL型とする。
一方、学校のまとめ役としての活動は6年生よりも多くなり、学校生活の中では中心的存在となる。この意味でも2階回遊動線に位置し、生徒会室や教職員コモンズ、放課後コモンズと近いことが大きなメリットとなる。
- 6年生 : 学校の最高学年として学びの集大成の学年となる。選択授業が増え、フリーな時間も多くなるので、その間を有効に過ごせるように、1階に図書室やラーニングコモンズと一体となった6年接拠点を設定する。玄関にも近く、1～5年生は日々6年生の卒業研究への組みなどを目にする事となり、学校文化を受け継いでいく。
選択科目による少人数授業が増えるので、40人クラスの確保よりは分割運営が柔軟にできる教室形態が望ましい。そこで6年生拠点はL型ではなく矩形の教室としている。

4.14. ひとりになれるスペース

総合的学習、グループワークなど、協働の場面が多く語られがちであるが、協議会では「一人になれるスペース」「一人で集中できる場所」の重要性が何度も問われた。これは具体的な空間設計でのつくり込みで対応するものであるが、現段階ではそのような空間が想定される部分をリストアップしておくこととする。

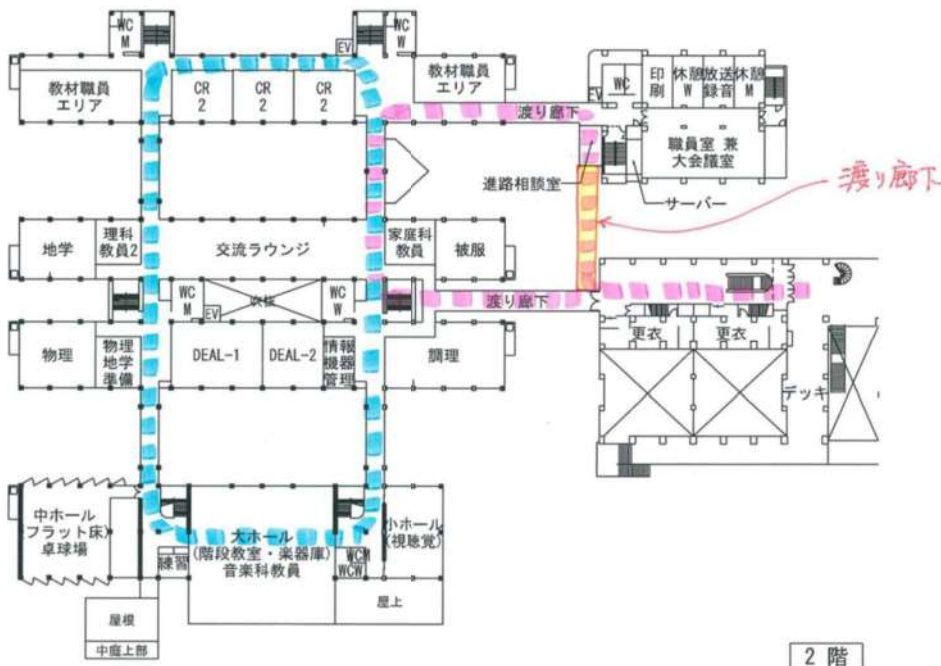
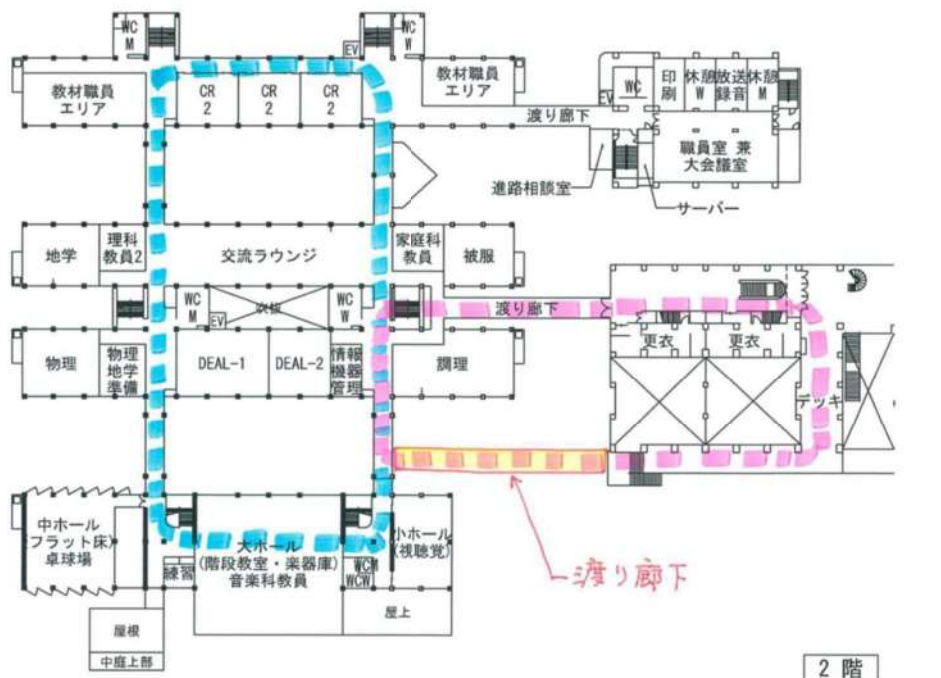
- ・ 昼休みの図書室 ～ 丁寧な家具配置、つくりこみ
- ・ 図書館前のパティオのベンチ
- ・ ラウンジ、放課後 commons の一角、など



4.15. 渡り廊下の検討

建物同士を直接結ぶ渡り廊下は、現校舎にも2か所設けられている（本校舎⇄総合教育棟、本校舎⇄体育館棟）。ただし現在はそれぞれ単独で行き来できるだけで、回遊動線は形成されていない。

今回の検討の中で、渡り廊下による他棟も含めた回遊動線の形成も議論されたが、新規構造躯体が必要となること、費用面、法的取り扱い、などの不確定要素も大きく、優先順位は低いと考えられ、今回の基本構想では採用されていない。



4.16. 協議会でのキーワードの充足状況

協議会でのキーワードに対して、今回の検討で充足された部分に、赤色の囲みマーキングを行った。

ほぼすべての項目を計画に取り入れることができた。

一部、「ニューノーマル」「テクノロジー」の面は、今回の検討の中では検討を進める余地がなかったが、今後の具体的な設計の際に検討が望まれる

学びの枠組み

コモンズ

- ・「コモンズ」～これからの学校をイメージさせる言葉
- ・学年コモンズ、教室コモンズ、25人等のファミリーが集散できるサブフレーム⇔大広間

ミックス

- ・時間、ゾーニングでの切り替え + デジタルの力でモードチェンジ
- ・今後の地域と学校の関係性を考える新しいセキュリティのあり方
- ・市民との協働へ。テクノロジーを活かす。

カリキュラム・クラスの単位

- ・生徒側の組織 ~ クラスの概念、カリキュラムとの連動、教科教室型などへの視座
- ・普通教室は結構空いている印象

附属+地域

- ・附属学校において、地域と協働というコンセプトはチャレンジングで意識が高い

運営・生活

セキュリティ

- ・2階フロアに集約したラーニングコモンズの可能性。セキュリティ設定。
- ・学環コモンズでのトラブル経験。以降カードキーなどで安全性を確保して運営。
- ・今後の地域と学校の関係性を考える新しいセキュリティのあり方→市民との協働へ
- ・セキュリティ。安心して学べる環境

上下足

- ・履き替えは多様な解がありうる。
- ・エントランスで拭う～ロッカーで履替え。
- ・1足性、2足性 → 1.5足性

ニューノーマル

- ・広い空間による換気計画
- ・カーボンニュートラル、ゼロカーボンキャンパス、産学連携

テクノロジー

- ・テクノロジーを活かし、今後の地域と学校の関係性を考える新しいセキュリティのあり方・時間、ゾーニングでの切り替え + デジタルの力でモードチェンジ

空間・スペース

回遊性

- ・「回遊性」などの空間の特徴と「附属での学び」との関連付けは？
- ・街並み、商店街のような校内空間
- ・技術室廻りのは道具が多く、回遊性のルート上にあると危ない可能性がある。

フレキシビリティ

- ・限られた床面積内でのフレキシビリティ
- ・日中の教室をフレキシブルに使うこと
- ・通路⇔教室という区分がはっきりしすぎている → 縦2本の廊下やいろいろな場所を、別用途にも拡張

新たな興味喚起

- ・準備室は貴重なラボ空間。
- ・ガラス張りの空間で興味喚起
- ・街並み、商店街のような校内空間での発見や刺激

中高の空間・大学の空間

- ・大学的な空間を目指すのか
- ・一足制における大学の校舎と中高の校舎の違い

附属校の総合学習の課題

- 協働作業スペースの不足
- プレゼンスペースの不足
- テーマ選びの段階での支援
- 図書館は大賑わい

ラーニングコモンズの成立

- 【原則1】居場所であること
- 【原則2】話してよい空間
- 【原則3】体系的支援
- 兼用について原則と展開

教科学習は文化との出会い

- 総合学習⇔教科学習 両方が大事
- ラーニングコモンズは総合学習だけでなく教科学習でも使う
- ひとりになれること。それが保証できる空間

コモンズの多様性

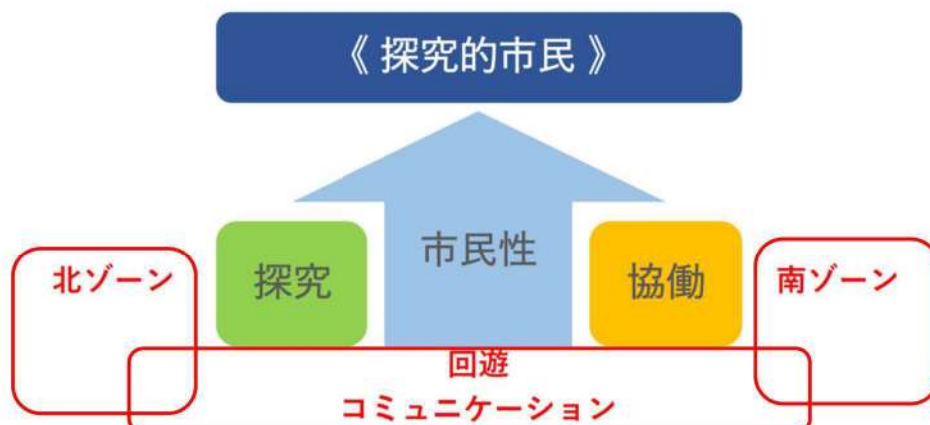
- コモンズとは「占有されていないこと」（空間のオープン性ではなく）
- 心理と空間を関連づけた居場所の形成。「集中と自由」「協働と個別」の2軸、「ほっこりとみっちり」などのオノマトペ等
- アートやパフォーマンスにおけるコモンズとは？

普通教室の進化

- 普通教室の質の確保の重要性。特別教室の充実に対し、建設当初からの懸案であり解消すべき
- 普通教室の板書面の不足
- 教室とプレゼンスペースは類似機能。普通教室に装備すべき機能の検討

運営とのマッチング

- 空き教室の活用：授業時間割などとセットで検討。可変型空間などの検討
- プレゼン空間の規模と数：120人規模のスペースが、最低2か所、理想は3か所必要と感じる
- 音の問題：音の出る特別教室の配置への配慮



① 学びそのものの革新によりGIGAスクール構想を先導する。



CASEER



「学校教育高度化・効果検証センター」との連携

- 専門課程の深まり
- 空間UIの活用
- 場面転換による協働的な校舎活用

② 学校の文化・芸術創造拠点化により共生社会・地域を創造する。



THE UNIVERSITY OF TOKYO



「芸術創造連携研究機構」との連携

- 協働パティオを中心とした地域連携スペースの形成
- パティオと一体となったものづくり commons の拡充
- プレゼンススペースの充実

- ①. 「探究・協働」の活動をふんだんに取り入れる **普通教室の整備**
- ②. 図書館を発展させたラーニング commons を中核に据えた探究空間に
- ③. 「からだまるごと」で他者・世界とつながる **空間UI (ユーザインターフェイス)** の導入
- ④. **特別教室の可塑的で効果的な再配置**
- ⑤. **広く市民に開かれたイノベーション・commons**
- ⑥. 学校空間の完全 **バリアフリー化** (エレベータの設置他)

東京大学教育学部附属中等教育学校より

4.17. さらなる展開の可能性

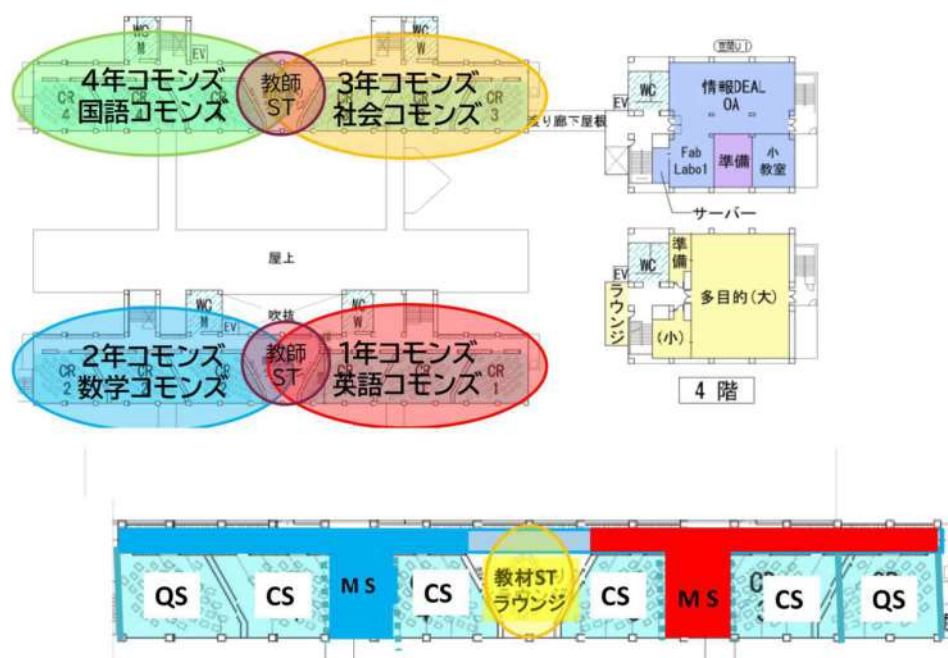
今回の検討は、現状の教育カリキュラムをベースに行った。これに加えて、ここでは将来に行われるかもしれないカリキュラムの変更時に可能な、さらなるプランの展開を試案する。

□普通教室フロアのゾーニング

下記はアドバイザーの長澤先生よりご提案いただいたものである。現在のプランをベースにしながら、国数社英の位置づけがさらに明快なものとなり、commonsのまとまりについても見方を変えることができる。並行して1～4年生の拠点として2階にアゴラと呼ぶスペースを提案していただいている。

これにより今回の協議会案はさらなる展開可能性が担保されていることがわかる。

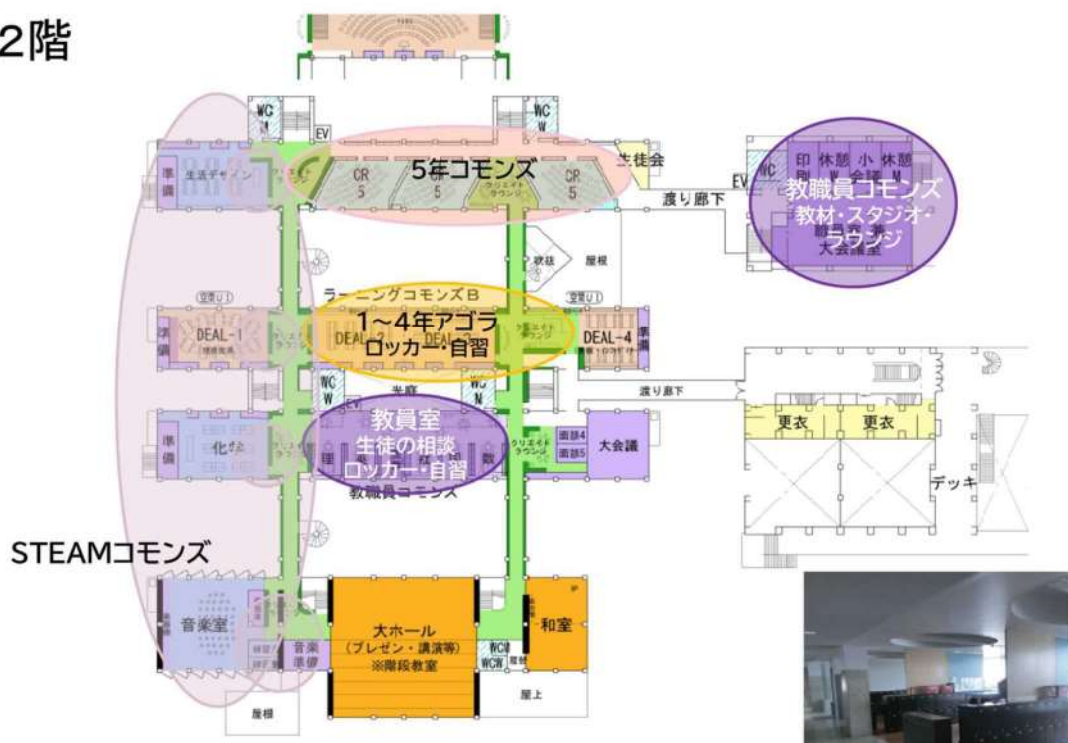
3階



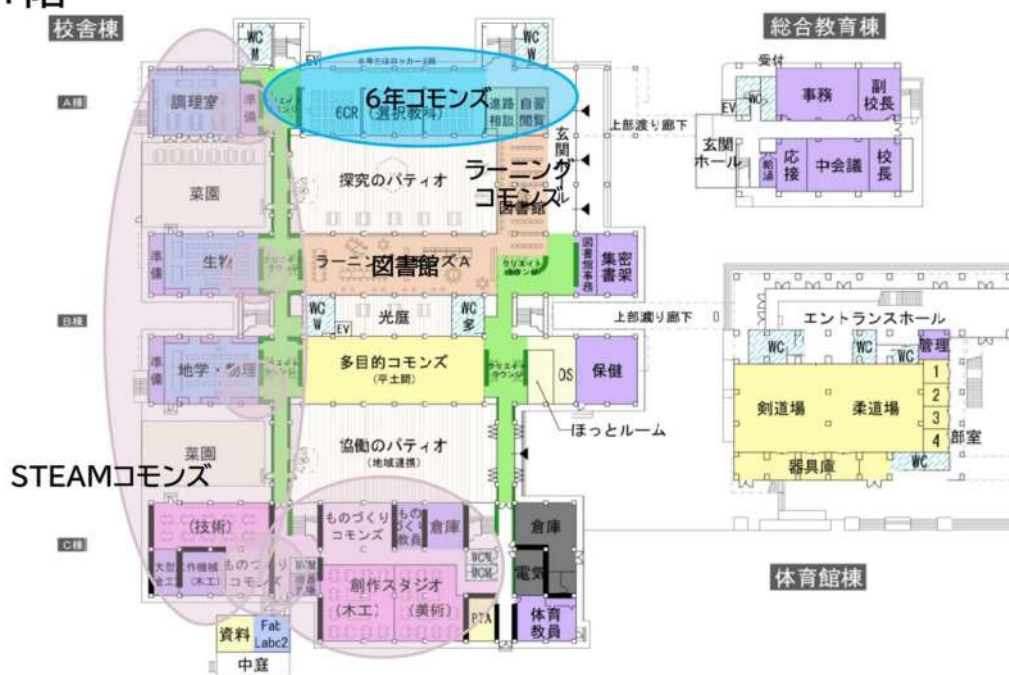
□低層部のゾーニング

下記もアドバイザーの長澤先生よりご提案いただいたものである。西側の特別教室のゾーニングを見直し、STEAM commonsとしてのまとまりを作ること、新たな教育に結び付く見方や契機とすることができる。

2階



1階



□DEAL室の性格付け

2階のDEAL室の東西両端の性格付けは、今後も検討されるべきものである。他の教科・用途などとの兼用・場面転換を行うことで附属の教育を支えていくゾーンであるので、多様なアイデアが望まれる。

(例)・数学向けの「黒板室」 ・映像ベースの「視聴覚室」 ・地学向けの「地球室」等